1908. 有吻目の四新種に就て. 昆虫世界 12(136)：510-512. 1909.

兵庫県佐用郡産半翅類追加. 昆虫世界 13(141)：205-207. 1950. 佐用郡産蝶類及び天蛾類の採集栞. 兵庫生物(4)：49-51.

また井口宗平氏については室井 綽博士著 播磨の昆虫と井口宗平先生(兵庫県博物学会会誌 No. 17：27-29, 1939) と云うのがある。

さらに大上字一氏に関するものでは次の様な報文がある. 建部恵潤. 故大上字一先生寄稿論文目録(1, 2). 兵庫生物 No. 3：30-32, 1949. 1(5)：98-100, 1951. 三木 茂, 井口宗平, 吉野善介. 故大上字一氏追憶記集. 兵庫生物 No. 4：54-56, 1950. 大上字一資料展報告. 兵庫生物 9(4)：247-248, 1988.

(MAR. 1988)

マツシタチャイロコガネの兵庫県下での分布

(兵庫県甲虫相資料・213)

高橋寿郎

マツシタチャイロコガネ Sericania matsusitai Sawada は澤田玄正博士により松下伝吾氏が岐阜公園の朽木より採集された1対の標本により新種記載をされた (Jour. Agr. Sci. Tokyo Nodai, Vol. 2, No. 4, p. 569-571, 580, 582. pl. XL, f. 15, 16. pl. XL1, f. 7, 8, 15, 1955) 種である。

この記載で澤田博士は博士自身が S. alternata Sawada ヒラタチャイロコガネを記載された際の (Nippon-no-Kochu, Vol. 2, No. 1, P. 12, 19-20, pl. 2, f. 1. pl, 3, f. 5, 6. pl. 4, f. 3. 1938) 1♀, Minogo, near Onomichi. 1♀, Totoromi Osaka の2♀が共にこのマツシタチャイロコガネの♀であるとされている。

その後野村 鎮氏はこの Sericania 属の日本産のとりまとめ論文の中で (Tōhō Gakuho, No. 26, P. 178, 1976) 本種に言及新に産地に Wakayama：Kanaya, Arida, Chohoji を加えておられる.

図説は野村 鎮氏の"原色昆虫大図鑑II (甲虫篇)" (pl. 63, f. 9, P. 125, 1963) と小林祐和

氏の"原色日本甲虫図鑑（II）"(pl. 70, f. 21, P. 394, 1985)がある．前者には分布を本州（岐阜・大阪・尾道）と後者には本州とのみある．

最近発表になった石田正明・藤岡昌介氏による"日本産コガネムシ主科目録"(LAMELLICORNIA別冊, P. 33, 1988）では本州（長野以西）となっている．比較的広く産する種ではないかと考えるのだが具体的な産地を文献によって拾って見たわけでないのでどの地方に多くいる種なのかよくわからなかった。

兵庫県からは従来本種は記録されていなかったように考えられるが県内でも広く産する様に思われるし特に神戸市内では初夏の候注意すれば割合と産する様に思われる。

兵庫県下でわかっている産地は次の通りである（一部を除いて標本は全部筆者所有保管）。

神戸市烏原（1♀, 25-V-1978, 1♀, 22-V-1981, 1♀, 3-V-1983, 1♂, 4-V-1983, 1♂, 10-V-1983, 1♀, 11-V-1985). 藍那（1♀, 5-VI-1978, 1♀, 20-V-1979），丹生山（2♂♂, 1♀, 18-V-1958），太山寺［2♀♀, 20-IV-1982, M. Tanaka leg. in his coll. ］，伊川谷前開（3♂♂, 13-V-1988, 4♂♂, 8♀♀, 19-V-1988）.

美嚢郡吉川町奥山（1♂, 17-V-1986）.

多可郡烏羽（1♂, 1-VI-1975, 1♀, 8-V-1976）.

相生市三濃山（5♀♀, 7-V-1972, 4♀♀, 3-V-1974, 4♀♀, 18-V-1974, 2♀♀, 1-V-1974）.

氷上郡柏原（1♀, 17-VIII-1958, 1♀, VIII-1960, T. Takahashi leg. ）.

一応県の中央部から南側には分布している種のようであり前に一寸ふれたように伊川谷前開では藤の花を網ですくうと入って来た。藤の花を食害しているとは考えられないのだが藤の花に来ているようには思われた。この様に個体数もそれ程採集し難いこともないのでもう少々県下の北の方にも分布している様な気もする。その採集時期がほとんど4月終りから6月初めにかけてで特に5月に多く見られるようであるが氷上郡下の様に8月での採集と云うのもあり注目してもよいと考えられる。

いづれにしても比較的渋味なコガネムシであるから余り注意されていなかった様な気がしないでもなく案外ともっと県下全域に分布している種なのかもしれない。

今回の同定については♂交尾器によったが原色図説もあり外見からもそれ程難しくないと考える。

ヒラタチャイロコガネに良く似ているがマツシタチャイロコガネの♂鬚角片状部は4節で第6節は第7節の2／3位の長さであるがヒラタチャイロコガネは5節と云った大きな違いがある。上翅の間室は多少交互に高低があることは特色の一つであるがヒラタチャイロコガネも同じ様な上翅である。このヒラタチャイロコガネの方も兵庫県下からは全く記録がなかったが宍粟郡音水で採集した1♂

(11-VI-1972)を現在手許に保管している。こちらの方は可成り少ない種の様で野村氏は奈良・三重県を記録しておられ(1976)，石田・藤岡氏によると分布は本州（近畿）となっている（1988）．

(JUNE・1988)

兵庫県産テントウムシ数題

（兵庫県甲虫相資料・214）

高橋寿郎

筆者はかって兵庫県産のテントウムシをまとめさせて頂いたことがある（兵庫生物 Vol. 3，No. 4：258-264，1958. Vol. 4，No. 2：96，108，1961）．その時点で兵庫県下から38種のテントウムシを記録した。兵庫県産と云っても神戸市が中心の調査で大変不十分なまとめであった。その後出来るだけ県下の調査を続けて来て現時点では68種のテントウムシが県下に分布していることがわかっている。一方日本産のテントウムシのほうも研究が進展して1963年には中根猛彦博士の“原色日本昆虫大図鑑 II，甲虫”が出版され，1971年には佐々治寛之博士の大著“Fauna Japonica，Coccinellidae が次いで1985年に同博士によって“原色日本甲虫図鑑（III）”と出版これらにより日本のテントウムシの同定も可成り小形種を除いてはしやすくなってきた。

兵庫県のテントウムシもまだ調査不十分の点を多く残しており少なくとも70種以上のテントウムシを産するのであろうと考えてはいるがここらあたりで再度県下のテントウムシ相をまとめておいたほうがいいのではと思っているが何分にも長文になるので発表の機会が得られず困っている。そこで今回は2，3の県下産テントウムシの種に就いて報文をまとめて見た。

○ ズグロツヤテントウの県下の産地

ズグロツヤテントウ Serangium punctum Miyake は宮武睦夫氏が1963年に愛媛県産1♀と兵庫県扇ノ産1♀によって新種として記載された種である（Trans. Shikoku Ent. Soc. Vol. 18，No. 1，P. 13-14）．兵庫県産のものは Paratype で辻 啓介氏が1961年6月11日に扇ノ山で